を、引き続き「霞町物語」をテキストにした著者を囲む会を開催した。

これは野間清治顕彰会と桐生市立図書館・桐生読連協による初めての共催事業として実施されたもので、会場は桐生市市民文化会館小ホール、参加者は、講演会が二百七十名、著者を囲む会が二百名であった。

壇上の浅田次郎氏は、ベストドレッサー賞を受賞するほどのお洒落上手でまた話し上手でもあった。日本の文化、歴史に話しが及ぶと、人間の個性、こころはなくなっていない、しかし日本人は壊すことが好き、歴史的建物も壊してしまう。美しい日本、日本人に回帰しなければならないと述べた。

「霞町物語」は、著者の自伝的小説であったので、その生い立ちへの質問や、その他の質問も多く出て、それに対する著者の熱意ある応答は大変好感がもてた。

最後に、活字から得た知識こそほんとうに自分のものになるものであると結んだ。

森戸晃子さんをお招きして

――野間顕彰会 書記――　長　京子

八月二十八日、市民文化会館スカイホールBにおいて桐生読書会連絡協議会（以下市読連協）と共催で行われた。この会は市読連協の「郷土文学要覧発刊記念」でもあった。

著者の森戸さんは現在、千葉県の八千代市にお住まいであるが、幼児期の体験を思いつくままに書き留めたものを段ボール箱に入れて行ったという。この本が初めてとは思えない筆の運びで、出版社に共同出版でともちかけられたそうだ。

薬剤師の資格を活かして薬局を開業し、それが軌道に乗ると、学習塾、ピアノ教室まで開くというバイタリティーに溢れた生活には、唯々感心するのみである。お見かけしたところごく普通のお人柄であるが、小さいころ義理の中で人生の機微を自然と会得したものであろうか。

標題は桐生の気候を表しており、風花の舞っている日に起きた事などで、絶対この題にすると決めていたそうだ。歯切れの良い語り口で、大勢の同級生に見守られ乍らの講演であった。

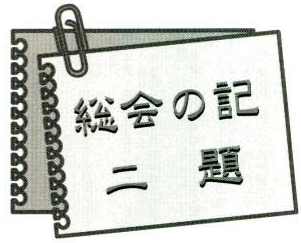
シュミット村木・眞寿美さんを囲んで

十三年度の著者を囲む会は、九月三日、講談社発刊の「ミツコと七人の子供たち」の著者でドイツ、ミュンヘン在住のシュミット村木・眞寿美さんを招き、市民文化会館第一会議室で行われた。

標題の「ミツコ」、クーデンホーフ・光子は明治二十八年、オーストリア・ハンガリー代理公使、ハインリッヒ・クーデンホーフ伯爵と結婚。夫と共に渡欧し、ボヘミアの居城で七人の子供を産むが、三十二歳で夫の急死により未亡人となる。次男リヒャルトは長じてECの原点となった「汎ヨーロッパ思想」を提唱、光子はその母としても知られる。

この本はボヘミアの公文書館に保管されていた光子の日記を翻訳したもので、女性の視点から考察されている。

シュミットさんは、多民族の入り交じるボヘミア地方の第二次大戦当時の話を、光子一家の離散と絡ませながら話した。国際結婚をしたシュミットさんにとって、の先駆者の光子の生き様を辿ることは、自分にとっても必要不可欠だったと締めくくった。（長　京子 記）



総会 そのあとで

――野間顕彰会副会長（行事担当）――　竹田賢一

総会は大体一年に一度と相場が決まっているが、その日を楽しみにしている会員が多い。

七月二十八日。桐生市市民文化会館四階の窓際が、半円形にカーブし展望の好い国際会議場で十二時に開会が恒例である。

開会にあわせて早目に部屋に入ると、控室の方から手作り料理の香りが流れてくる。岡田館長はじめ婦人役員が準備に余念がない。

会議は森会長あいさつに始まり、河原井名誉会長も元気な姿をみせていただき、経過報告は各担当者から◆ふるさとの風第二集は『稲川東一郎伝』を発刊し、第三集は『彦部駒雄伝』として、ふるさとの先人の偉業を、市民に知らせる。◆読書推進賞を昨年十月献花式当日に実施。研修旅行も好評で、今年も富士山麓へ歴史と文化の旅を企画し、参加者が多ければ本会の事業収入増が期待できる　◆共催事業では「日本人のこころ」と題して五木寛之先生の文化講演会に一、三八六名の参加がありました。入場者には、先生の著書「日本人のこころ」を進呈するユニークな企画だった。

議事は竹田副会長が議長となり十三年度事業と決算報告そして十四年度事業計画と予算案審議は順調に議決され、